

した。

日甜は育苗技術指導を行う。また、ビート苗移植機を製造する子会社のサークル機工（滝川市）が2月、天圃農技とライセンス契約を締結、機械化に向けた技術指導を行う。

今年は同市など同自治区内2地域で当初計画していた800ヘクタールをさらに増やし、計約1,500ヘクタールで試験栽培を行っている。新型コロナウイルスの影響で現地指導ができない状況だが、現地から送られてくる動画

や写真を通して指導している。同社の寺澤秀和取締役紙筒事業部長は「北海道より低温のため移植のメリットは大きい。互いに協力して現地での栽培技術を構築したい」と話す。

ペーパーポットは同社が60年前に開発。清水紙筒工場（清水町）で製造している。野菜用を中心に米国などに輸出も行うが、紙筒事業全体に占める割合はわずか。国内需要の先細りが予想される中、同社は海外販路拡大を目指しており、4月には部内に海外事業課を新設している。

ホクレン カルビー包括協定 ジャガイモ生産・流通など

2020年8月5日

【札幌】ホクレン（札幌）とスナック菓子メーカーのカルビー（東京）は5日午前、北海道農業の振興に向けた包括連携協定を結んだ。道産ジャガイモの安定的な生産や流通、新商品開発などに取り組む。第1弾として同日、ホクレンのオリジナルジャガイモ「よくねたいも」を使用したポテトチップスを新発売した。

連携事業内容は（1）道産ジャガイモの安定生産調達体制の構築（2）道産ジャガイモを中心とした新商品開発と販売促進（3）原料供給にかかわる種ジャガイモ供給体制の強化（4）ジャガイモ以外の農産物を用いた新たな食領域の共同開拓（5）栽培技術と農業資材などの開発促進（6）北海道ブランドを生かした商品訴求とPR分野における連携—の6項目。

ホクレンは連携を通じて、農産物の流通量の確保や、生産者の経営安定化につなげる狙い。貯蔵・物流分野におけるノウハウの共有や、商品共同開発を通じて市場開拓を進め、生産基盤の維持・強化を図る。

カルビーは2024年3月までの中期経営計画で、国産ジャガイモ調達量を現状比20%増の40万トンに高める目標を掲げており、連携によって安定的な調達体制の強化を目指す。総菜・中食（なかしょく）領域での事業や、ジャガイモ以外の農産物を活用した商品開発なども進めたい考え。

第1弾の商品は「チップスネクストオリジナル」（1袋50グラム、6袋セットで税込み1,944円）。空気中の酸素や窒素、二酸化炭素の割合を調整するCA貯蔵により甘みを増したホクレンの「よくねたいも」（キタアカリ）

を素揚げした。カルビーオンラインショップで購入できる。

同日、札幌市内で行われた調印式で、ホクレンの篠原末治会長は「北海道ブランドのさらなる付加価値を創出した商品が提供されることを期待する」と語った。カルビーの伊藤秀二社長は「安全・安心でおいしい作物を使った商品を北海道、日本、アジア、世界に届けていきたい」と述べた。



「よくねたいも」を持つ篠原会長(右)と新商品のポテトチップスを持つ伊藤社長